

「都市城壁とインフラ」史観

一般社団法人 全日本建設技術協会 会長 おお いし ひさ かず
大石 久和



インフラストラクチャーとは社会の基礎構造を意味し、それは個人や企業の活動の基盤となるもので、個人や法人などの利潤動機では「まったく提供されないか、されたとしても非常に偏りが大きい」財やサービスであるから、公共が提供するしかないものである。

したがって、公共が提供を怠ればたちまち「社会の基礎構造」は陳腐化していくし、安全や利便性の各地への普及も滞ることになる。この20年間、わが国で起こったことはまさにこの現象が連続してきたことであり、それがわが国の経済成長を阻み国際競争力の毀損を招いてきた。デフレが1995年からずっと継続している大きな原因の一つでもある。

このことは、このコラムでも何度か紹介してきた。われわれ全建会員が携わる公共事業とは、社会の基礎をなすインフラの整備・管理であって、ストックとなって人々の生活に貢献する。生活の安全や効率、快適といったサービス（価値）の多くが個人の努力によるもの以上に公的なサービスに依存しているのである。

本当に困ったことなのだが、このことをわが国の政治やメディアが理解できないのである。一部はすでに紹介したこともあるが、以下のような発言をわが国の政治家から聞いたことがあるだろうか（肩書きはすべて

当時のもの）。

先進国首脳の発言

「実際に雇用を創出し、経済を成長させることに投資すべきだ。その一つが、新しい道路・橋梁・学校・港湾の建設である。」

「新たな仕事を創出し、経済を刺激する最善の方法の一つは、国内のインフラを再構築することだ。」（以上、アメリカ・オバマ大統領）

「インフラは、現代生活を支え、経済戦略の重要な要素であることから、後回しにできる課題ではない。」

「インフラは、国のビジネスの競争力に影響し、またビジネスを成功へと導く見えない糸である。」（以上、イギリス・キャメロン首相）

「質の高い交通インフラは、欧州及びグローバル社会におけるドイツの競争力を保障するものとなる。」（メルケル首相らのドイツ連立政権合意文書）

「インフラへの投資は重要である。予算が抑制されていても、インフラへの投資は長期的な経済成長に貢献するからだ。」（イタリア・レンツィ首相）

「フランス交通関係インフラ基金を設置し、その額を引き続き増額する。」（フランス・コペ予算担当大臣）

「インフラストラクチャーへの投資を怠っては、グローバル化にともなう競争のなかでイタリアは生き残ることができなくなる。」
(イタリア・プロディ首相)

「交通インフラへの投資を増額させることで、わが国の経済を活性化し競争力を強化する。」(スペイン・ソルベス経済財務大臣)

「成長と雇用創出は、適切な交通インフラと高いモビリティ水準によってのみ可能となる。」(ドイツ・ラムザウアー連邦交通大臣)

「経済成長なしに繁栄が可能であるという認識は完全に誤っている。また、交通の増加なしに経済成長をなし得るという認識も同様である。インフラは成長と繁栄の原動力である。」(ドイツ・ドブリントデジタルインフラ担当大臣)

なぜ、わが国の政治家やメディアは、インフラ発言ができないのか

ほとんどの主要国の首脳が、このようにインフラの重要性について演説などで触れ、国民にそのための財政支出の必要を訴えているのに、先述のようにわが国の政治家や首脳が「インフラの重要性」について語ることはまずない。

使ってもせいぜいインフラ整備の手段である「公共事業」という言葉であり、メディアではそれが多くの場合、何の定義も示さないまま「無駄」と「バラマキ」という形容詞とともに登場する。これではインフラの意味が国民に理解されないのは当然なのだが、日本だけがこうした情けないレベルにとどまるのはなぜだろうと長い間考えてきた。

それは「都市城壁」経験の有無にかかわるとやっとわかったのだ。中国からヨーロッパまでのユーラシア大陸で発展してきた国々で、

都市を城壁で囲む経験を持たなかった国は存在しない。ヨーロッパ文明のルーツであり、つまり世界文明の基礎といってもいい5500年前の都市国家であったシュメールの都市は、いずれもが強固な城壁で囲まれていた。

費用も労力も莫大なものを要するけれども、しっかりとした城壁を建設して都市全体を囲まないことには人が集まり安心して眠りにつくことなど不可能だったのだ。それほどに頻繁に外敵からの攻撃があり、それが虐殺を伴う凄惨なものだったということなのである。

そのために、「皆が皆のためにお金と労力を出し合って強固な城壁を建設し、敵の攻撃があれば皆で防御し、日頃は城壁の維持を皆で心がける」という、まさにインフラの必要性の発見と発明がすでに5500年前からあったのである。

中国や朝鮮半島にもある都市城壁が、わが国では有史以来存在したことがないのである。インフラが人々の生命・財産を守ってきたという経験が皆無なのだ。この経験の差は、われわれ日本人とそれ以外の民族との「歴史観・死生観・宗教観」などの差異を規定する決定的な事実なのだが、不思議なことに歴史学はこれにほとんど無関心である。

日本史学者は西洋史を語らないという学者の世界のルールがここでも貫徹しているから、両者をまたいで考え理解することがほとんどなされていない。世界のなかで日本人だけが都市城壁を用いずに暮らしていくことができたから、未だに日本人はインフラの意味や効用が理解できていない。そう考える以外にこの状況を説明できないのである。